

# 「企業者」と資本主義過程の「革新」について

——シュムペーター学説の主要問題——

浜 崎 正 規

- 一 はしがき
- 二 『本質』・『発展』の粗描
- 三 経済発展と「企業者」の経済学的論理
- 四 「企業者」と「革新」の原理
- 五 「革新」に対する批判の検討
- 六 あとがき
- 一 はしがき

資本主義の体制的認識と人間類型との関連分析は、われわれにきわめて厳しい科学的理論形式を要請する。

現実の資本主義社会構造が内面的規制によって、あしかせにまつわる悩みを克服しようとしていることは、「豊饒の中の貧困」の言葉にただよわせている。いわ

「企業者」と資本主義過程の「革新」について（浜崎）

ば資本主義の「エンジン」が資本主義の技術体系（広義に解して生産力と同義に）の運営原理に刺戟されつつあくまでも生の姿<sup>なま</sup>で呼応しえた「場」は、現実社会のうずの中に見いだすことは出来ない。このような現実認識の関心こそ、反面その現実のうずがはらむ、切実な社会体制的問題の解決にわれわれを導くのであるが、ここにおいてすぐれて多くの示唆をなげかけてくれたのはJ・A・シュムペーター（Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950）の分析の武器である。周知のように彼は、哲学的・歴史的・社会学的教養の豊かさを背後にひめながら、資本主義をきわめて合理性の追求過程として考える。そうしてそのことを彼特有の「企業

者」(entrepreneur) という人間類型の開拓者の行為にもとめ、その行為主体が「安眠すべきベツト」を求めるべく競争する「革新」(innovation)の導入の相に資本主義社会の創造的發展を見いだした。しかしながら彼の場合「経済的進歩は非人格され、自動化される傾き」を不可避免的にえらび、自らその経済体制は崩壊せざるをえない。とはいえそれは、資本主義の失敗のゆえにでなくむしろその成功のゆえに必然的に没落する。——『資本主義・社会主義・民主主義』(“Capitalism, Socialism and Democracy,” 1942)は、この逆説的な命題に対する論証の作業といえよう。——いわば“Capitalism is being killed by its achievement.”といえることは、まさしく彼の理論体系の帰結である。武藤光朗教授は、「この逆説の論証過程におけるシュムペーターの叙述は、……あくまで経験的社会科学者としての限界を守り、マックス・ウェーバーのいう意味における『社会科学の認識の客観性』を失っていない。『経済發展の理論』によって明確な形で現われる

にいたったシュムペーター経済学の意味理解の性格すなわち合理的図式の形成によって精神的意味形像の理解を求めるという性格が、ここでは見事に花を開き、いわば経験科学として達し得るぎりぎりの限界がそこに露呈されている<sup>1)</sup>。とのべておられるがそのかぎりでは、シュムペーターの経済理論は、資本主義経済社会の合理的図式を対象とする厳密に自律的な科学理論であるといわれなければならないであらう<sup>2)</sup>。しかしながらスウィージー(Paul M. Sweezy)教授が指摘するように、シュムペーターの動態理論に対する学問的態度は、純経済的領域のみでなく、きわめて広い領域にわたっていたということは、認めなければならない。別の機会にふれておいた<sup>3)</sup>ように経済的機能についての構図は、制度としての社会文化の環境・人間の存在傾向・動機あるいは行為の様相等いいわゆる所与(Daten)を分析する必要がある。シュムペーターの場合、そのことは自らの体系的としての「純粹経済学」のアウトノミーを問題とする場合一応除外されるものである。

しかしこの帰結を前提としながらも彼は経済理論と経済与件との間に生ずる交渉を認める。そうしてこれこそ本質的に彼の場合経済理論と経済社会学との交渉の問題に達するのである。

さてわれわれはこの小論での試みは、まさしくかような学説としてのシムペーターの理論構成上の「企業者」と「革新」との関連を考察し、これに対する批判を検討するところにある。前述したように資本主義の「エンヂン」は、現実社会においてはたして原理的にその役目を果しているといえるのであろうか。客観的技術法則（人間の恣意の介入をゆるさない）に対して「新たな因果系列を構成する人間の意思の自発性が関与しうる」<sup>(4)</sup>度合がつねに経済社会の創造＝発展に志向しうる刺戟である限りシムペーターの「革新」は、強力な「エンヂン」としての使命をもちえたであらう。しかしながら現実の「市場」構造との関係において、資本主義の生産技術系列に考察をめぐらした場合、はたしてそのままの「エンヂン」調子の構想でよいので

あろうか。われわれは、第四節においてこの点を問題としてとらえるためC・S・ソロー(Carolin S. Solo)教授の見解を考察したわけであるが、それは単に問題の处在を指摘したにとどまった。

#### 註

- (1) 武藤光朗著「経済の計画化と自由の問題」三八頁、ウエーバー『シムペーターにおける問題の所在——『経商論纂』中央大学経済・商学会発行第四一号・一九五一・一二月』

- (2) シムペーター学説は、既存の学説の綜合にすぎないとペルー(Perroux)はいう。La pensée économique de Joseph Schumpeter (Introduction à la traduction française de la « Théorie de l'évolution économique » 1935, p. 14. しかしながらわれわれは、彼が透徹した識見のもとに資本主義の経済問題を理論的に分析した独特の創造的科学性を認めないわけにはゆかない。

- (3) 拙稿「O・H・テイラーのシムペーター学説における『帝国主義論』『社会階級論』の位置づけについて」『立命館経済学』第二卷・第一号二八年・二月発行）一二七頁を参照していただきたい。

- (4) 『統制経済論序説』高橋良三著 昭和二十五年一月刊 六頁参照。

## 二 『本質』・『発展』の粗描

シュムペーターがとくに社会学者としてすぐれている点は、作業意識の歴史性にあるといえよう。いわば資本主義の発展過程を歴史的統計的検証のもとに把握したことである。そうして彼は、生産性の向上と資本主義の合理精神の顕象分析を試みその拡大現象に資本主義文明の意義をみいだした。<sup>1)</sup> そこにおいて展開されたブリリアントな社会学的分析もこのような歴史的観察のもとにおいて始めてみいだされたものといわなければならない。さてシュムペーター学説の獨創性を発見しようとする場合学者はそれを静学的分析と動学的分析の二元論的構造にあることを指摘した。そうして彼の静態無利子説・信用創造説もこの二元論との関連において論議が展開された。ともあれわれわれは、マトシヤル体系を動学一元論的用語において使用する意味でシュムペーターの学説を二元論とすべきでなく、いわば彼の体系が静学・動学の分析をあわせもつとい

う意味において二元論と語るべきであろう（このことに対する詳細な説明は後日に譲る）。

われわれの課題は、歴史的社會經濟体制の検証として描かれた「企業者」を資本主義の革新過程との関連において考察を進め、そうして革新原理の限界と「企業者」の変貌をみいだすところにこの小論の目的が存在するのである。しかしながらわれわれは後述する理解に資する意味において、シュムペーターの学説の構成上のポイントをなす『理論經濟学の本質と主要内容』（論を進めるに當って以下『本質』と略す）（“Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie,” 1908）および『經濟發展の理論』（以下『発展』と略す）（“Die Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung,” 1. Aufl., 1912, 4. Aufl., 1935.）の二著をきわめて概略的に粗描することにする。さて前著すなわち、『本質』におけるシュムペーターは、人間行為の動機・社會的事象の動力・經濟行為の目的というようないわゆる興味ある問題を回避することによ

って、経済理論の本源の明確性と自律性をもとめた。そこにおいて彼は、経済諸量の相互依存関係すなわち交換関係の記述が純粹経済学としての理論経済学の課題であるとした。もちろん彼の場合「純粹且つ自己完了的であつて他の諸学科から独立した理論の解決しえない経済的諸問題が疑いなく存在する。」<sup>3)</sup>したがって経済理論の領域は、二つの部分すなわち一方では以上のような純粹経済学と他方厳密に経済的であるが純粹経済学の取扱ひえない問題とに區別されるのである。このことを裏返していうならば、理論を要請する問題『型』自体がおのづから「静学」「動学」を定立する可能性をもつということができよう。したがってシムペーターが述べたように<sup>4)</sup>それら「静学」と「動学」とは全く相異なる領域であるばかりでなく処理する問題が異り、その方法、その材料をも異にするのである。ようするにそれらは同一理論体系の並立的な二章ではなく、かえつて全く独立した建物である。

このように『本質』において暗示をなげたシムペ「企業者」と資本主義過程の「革新」について（浜崎）

ーターは、動学を完成するために『發展』においてそれを課題として解決を迫つたのである。前述したように『本質』における経済理論の構図は、いわば経済諸量の相互依存関係の分析にあり抽象的数学論理の擁立・その論理的な展開であつたといえよう。まさしくその同時的分析の用具は、全歴史過程に適應しうるものとしてのツールであつた。換言すれば『静態』における仮設によつて理論的客観性をもちえた現実分析の構図は、極限概念として認識されうるものであつたといふべきであらう。しかしながら『發展』におけるシムペーターは、資本主義経済時代の特定の時点における経済現象の分析を企図したのである。「瞬間描写」的均衡分析の理論から「経済循環」の理論への経済社会的考察に進んだのである。しかしながら、この瞬間描写的均衡分析から飛躍したシムペーターは、一層純経済的なものを要求し發展理論の自律性を保持しなければならなかつた。すなわち『發展』において彼は、人口の増加や富の増加のような事件の變化は、

それが連続的であるかぎり静学的分析によって処理されることは可能であるという。<sup>5)</sup> いわば古典経済学者およびマーシャル経済学が、動学的現象と考えた経済のいわゆる「有機的成長過程」もシュムペーターにおいては、静学の分析の対象となりうるのである。<sup>6)</sup> またたとえ条件に変化が起って均衡状態が攪乱され、そうして経済循環軌道に変化が起ったとしても、その変化が経済外的な原因にもとづくものであるかぎりにおいて経済理論は、かような条件の変化への新しい適応過程を記述しうるにすぎないのであって、そのこともまた静学の課題として処理されるものである。このように彼は、経済の発展に関する理論的分析を企図する場合、それら問題群を検討することにおいて純経済的なものに呼応しその検証に当るのである。では彼は、動態の「本質的事実」として何を内容とするか、そうして何をとりあげたか、われわれは、この点について『発展』における「日本版への序文」<sup>7)</sup>の中に彼の意図をみいだすであらう。すなわち『発展』において彼は、

「一定の時間にまたがっている経済変動過程の理論モデルを構成することにあつた」ということは、「経済組織がそれ自体をたえず転形せしめるような動因をいかにして生み出すかという課題に答えることであつたわけである。

さてシュムペーターが、ローザンヌ学派 (École de Lausanne) の一般均衡論の系列をなす人であることは、人人の指摘するところである。<sup>8)</sup> たしかに彼は、経済組織の概念と経済諸量の相互依存関係の理論をワルラス (Léon Walras) から学んだ。しかしながら本質的にその体系は、静学的であるといわなければならない。いわば「瞬間描写的」な均衡理論としてあって、その場合経済生活の「場」は本質的に受動的なものとならざるをえない。『発展』におけるシュムペーターは、いさぎよくこれに対して反抗するのである。すなわち彼は、経済組織の内部には、到達された均衡をそれ自らの力で破壊して行く活動力の源泉が存在するはずである。換言すれば内発的経済変動についての

純粹に經濟的な理論が存在しなければならぬと考えるのである。『發展』において企図したのは、まさにこの点に答えるものである。彼が「發展とは専ら自己

自身から生む經濟生活の循環の變動、『自己自身に委ねられて』外部からの衝擊によって動かされていない所の國民經濟に起り得べき變化のみが理解さるべきである。<sup>9)</sup>「若しも經濟的領域そのものにおいて成立する變動原因が存在せず、又實際上では經濟的發展と呼ばれている現象にしても実は全く經濟の与件の變化にのみ基づいたり將又經濟は此の變化に漸進的に適應するに過ぎぬことが明かになるならば、吾々は其処には如何なる經濟的發展もないと云うであらう。」<sup>10)</sup>と述べていることは、前述した所をまさに裏づけるものである。かようにして彼の發展の概念は、經濟の内在的論理から生成するものとして理解されるのである。彼は前掲した「日本版への序文」の中で、ワルラスやマーシャルの分析用具が外的攪亂への經濟体系の適應過程の叙述にすぎない点を指摘し、そうして自分はいかなる分

析にあきたらないで經濟体系内に内在的な經濟發展の原動力をもとめ企業者の革新に到達したことを叙述している。<sup>11)</sup>

彼の意味する發展は、循環また均衡傾向のような諸現象の下に現われるのではなく、それらのうちに外的な力のように作用するものである。すなわち「それは循環運動とは異って循環が實現さるべき軌道の変更であり、また或る均衡状態に向う運動過程と異って均衡状態の推移である。しかもかかる總ての變更若しくは推移を指すのではなく、單に第一には經濟から自發的に生れ、第二には非連續的な變化を指すに過ぎない。」<sup>12)</sup>「そうしてわれわれの發展理論は、——それは特殊な現象の存在の認識の中にすでに含まれているものではない——この現象及び其の随伴現象と其の問題に向けられている特殊なる考察方法であり、循環軌道のこの限定的意味での變動の理論であり、また國民經濟が或る与へられた重心から他の重心へ移る轉換の理論（動態）であって、循環そのものの理論、転々する

均衡の中心に対する経済の不断の適応の理論、したがってまたこれらの変転のもたらす影響の理論『静態』とは全く対立するものである。<sup>12)</sup>かようにして経済の発展は自己自身から生成する経済生活の循環の変化であり、また経済から自発・自転的に生れた非連続的な変化である。いよいよわれわれは、シムペーターがその発展の原動力として何を考えたかを考察する段階に訪れた。節をあらためてその検討に進まねばならない。

註

- (1) J. A. Schumpeter, "Business Cycles," A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process, 1939.  
彼は序文において景気循環を分析することは、まさに資本主義時代の経済過程を分析することにほかならないとのべ、資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析を企図している。彼は一般的に景気循環や経済恐慌を一個独立の現象と考えるそれまでの理論的態度が、これらを経済の攪乱的要因として処理し、そうしてまたノーマルな経済傾向との乖離として問題にする態度に対して反対し、景気循環こそ資本主義の生活態度であると考えて

る。

- (2) J. A. Schumpeter, "Capitalism, Socialism, and Democracy, 1942. Part II: Can Capitalism Survive? M. The Civilization of Capitalism, pp. 121-130.  
「理論経済学の本質と主要内要」木村健康・安井琢磨 訳一七〇頁
- (4) 『本質』木村・安井訳書一七〇頁
- (5) "Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, 1912. SS, 95-96. 中山・東畑訳書一五九頁
- (6) Robbins L., On a certain ambiguity in the conception of stationary equilibrium, in "Economic Journal," June, 1930.
- (7) "Essays of J. A. Schumpeter," Edited by R. V. Clemence. 1951. "Preface to Japanese Edition of "Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, pp. 158-163.
- (8) Karl Pribram: Prolegomena to a history of economic reasoning, (The Quarterly Journal of Economics, Feb. 1951. pp. 32-33. Vol. LXV. No. 1.)  
プリブラムは「シムペーターがJ・B・クラークによってなされた静態経済の条件の分析から出発したことを指摘し、ワルラスによって形成されたブレミスに従ってこれらの条件を叙述したと述べている。この論文において興味のある点はシムペーターが一種の弁証法の装置を経済動学に導入したと述べていることである。このことは、最近向坂逸郎教授が「シムペーターとマル

クス」(『経済学研究』九州大学経済学会発行二八年三月)においてなされている教授のシユムペーター批判に對置させられうると思う。

- (9) (10) “Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung,” 1912. S. 96.

- (11) 『景気循環』第一卷九八頁において同様なことをのべている。すなわち

ある時点の局面の与件の急速な認識とそれに反應する合理的行動の描写としてこのワルラス及びマーシャルの伝統的な理論は、それ自体として正しいし、またそれからの偏奇な摩擦・ラグなどを導入して適格に考察されうる。しかしながらかかる分析が十分であることは、分析される過程が stationary であるか、あるいは steadily growing である場合に限定される。

いまだ経験されたことのない経営事業活動の新しい可能性については、それは全然役立たない。われわれのなすべきことは伝統的分析をただそれが役立ちうる「場」を限定することであり、役立たない領域に関しては、他の仮定を定立することである。伝統的理論は自分では革新を實行しない商会 (Firm) の革新への反作用を叙述するに役立つ。

- (12) “Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung,” S. 99.

中山・東畑訳書一六三頁

「企業者」と資本主義過程の「革新」について (浜崎)

### 三 經濟發展と「企業者」の經濟

#### 學的論理

C・メンガー (C. Menger) は多元的經濟社會の全体認識——(經濟的次元の多樣性の認識)を試みるにあたって超主觀的な概念としての「經濟性」(Wirtschaftlichkeit)に統一原理をもとめた<sup>1)</sup>。ワルラスに始まるローザンヌ学派がメンガーの「經濟性」を客觀的經驗的なものに責極化するに「市場」の合理的機能をもつてしたことは周知のところである。すなわちヴィルフレド・パレート (Vilfredo Pareto, 1848-1923) の定立した「選択理論」(theorie des choix, theory of choice)も一応經濟現象を社會經濟的姿態との関連にもとづいて分析しようと試みるものであるとはいいうるであらうが、しかしながら彼はその「選択理論」を個人の行為の主觀的な動機を問うことなく単に個人の行為の結果として起る純粹に客觀的な經濟諸量間の關係だけに純粹經濟學の對象を限定することによって構成したの

である。たしかにその「選択理論」は経済諸量を函数關係式において求めることによって、合理的図式を構想しそれによつて経済理論上数量分析の範圍を著しく拡大しえたということができるであろう。けれどもその場合、「経済学の対象は、全く機械的な経済諸量の運動だけであつて、その意味において経済世界は、かれらにあつて（ローザンヌ学派の人々をさす）完全に古典物理学的な『自然』に照応し、觀察者たる経済学者の觀察から全く独立な客觀的な数量關係として、觀測可能な世界として存在している。」<sup>3)</sup>ということも認めなければならぬであらう。いわばたとえローザンヌ学派の均衡理論が原理的に嚴密さを保持しえたとしても、それは、同時瞬間的ないわゆる同次元の均衡描寫の理論としてのみ構想されたものであり、多元的な發展的經濟現象を説明することには、もろくも退却しなればならない。かようにしてローザンヌ学派の經濟理論は、靜的均衡の仮説を前提としこの狀態における經濟量の函数關係を記述することに面目があつたと

いなければならぬ。さて經濟發見的現象はきわめて質的變化の過程現象である。そこにおいて經濟諸量は相異なる「場」の質的非統的变化を辿ることがいえるなら「ローザンヌ学派の一般均衡理論にあつては、すべての經濟變動は、結局同一のリズムに環元せられ得、同一の均衡時点においてその作用を停止するものと想定されている。」<sup>4)</sup>という杉本栄一氏の論議もその同一次元において經濟諸量の相關關係を連統的に跡づけようとした靜的均衡理論の立場を指適したものとすることができるといふことができる。われわれは、經濟社会の全体的認識を質的非連統的な發展の原理に立つてもとめなければならぬ。ここにおいてこそシュムペーター理論の「經濟動学」の作業の意義が存在するのである。

シュムペーターは、純粹の靜態經濟学は「或る種の經濟事實の一抽象像、これらの事實の記述に使用すべき一罐型に他ならぬ、それは或る種の仮定に基いてなり、そしてその限り、他の精密科学が執れもそうであるように全く同様にわれわれの恣意の一創作物であ

る」と考えるところから、そこに科学の認識対象と現実の経験対象との間の原理的不一致を認める。そしてその純粹に理想的な思维的構図をば現実把握のための理解の手段として前提におき（彼の静態理論）経済発展の純理論的構想の認識に到達するのである。そこにおいては、全くローザンヌ学派とはあい入れない異質的理論の展開を企図したということができるであろう。すなわちワルラスの「予備的模索」が現実の経済的變動におきかえるための論理上の手段として考えられており、そうして経済變動は、すべて同時におこり、同時に終煩するいわゆる「同時化」の方法をとっている。またすでに指摘したように、パレートの方法もきわめて抽象的な「同時化」の方法であった。ではシュムペーターの発論理論はどのような構成をなしているのであろうか、われわれは前節において極めて概略的に『本質』及び『発展』にわたってそれを考察したのであるが、本節においてその『発展』を中心に検討を試みてみよう。

「企業者」と資本主義過程の「革新」について（浜崎）

彼のみる資本主義は『景気循環』においていうように借入金によって経済上の革新がまかなわれる本質的に「開いた社会」としての私的性格の経済社会であった。<sup>9)</sup> もちろんこの資本主義観が、全面的に定義を蔽うものであるとはいえないであろう。しかしながら、一面的な表現で資本主義の本質をうたった言辭であるということとは、出来るであろう。シュムペーターは『発展』において、資本主義社会の発展への衝撃として経済上の「革新」を考え、その新結合の担い手として「企業者」に注目した。ティヤムス (A. C. Tayaans) が “Tarde and Schumpeter: A Similar Vision,” (The Quarterly Journal of Economics, November, 1950, pp. 611-622.) に於ていうように彼の社会観がガブリエル・タルド (G. Tarde) の “L'Invention, moteur de l'Evolution Social,” Revue Internationale de Sociologie, 1902. において展開されている「社会進歩」の見方に、あるいはヘンリー・ベルグソン (Henri Bergson) の “Evolution créatrice,” 1901. の社会進

化の構想に共通点をもち、また血縁関係にあるといえるであらう。いまはこのことの論議はさしおくとしても、シュムペーターが経済体制と人間類型との適合因果の関係（adequate Verursachung）を問題とし、それを経済発展にとり入れたことは、別して偉大な貢献といわなければならない。

彼によれば「生産をするとは吾々の処分範囲に存在する諸物諸力を結合することである。生産物並びに生産方法の変更とはこれらの諸物諸力の結合を変更することである。旧結合から漸次に小さき歩みを通じて連続的に適応しながら新結合に到達され得る限りにおいても確かに変化又は場合によっては、生長が存在するであろう。然しそれは均衡考察の力の及ばぬ新現象でもなければまさに又吾々の意味する発展でもない。さうでない場合、新結合がただ非連続的にのみ現れることが出来、また事実現れる限り、発展に特有なる現象が成立する。斯くて吾々の意味する発展の形態と内容とは新結合の遂行（Durchsetzung neuer Kombinationen）

nen」という定義によって与えられる」という。そうして、経済の動態を可能ならしめ発展の形態と内容とを与える「新結合の遂行」の概念は次の五つの場合を含むという。<sup>9)</sup>

- I 新しい財貨新しい品質の財貨の製造
- II 新しい生産方法の導入
- III 新しい販路の開拓
- IV 新しい資源の獲得
- V 新しい組織——独占的地位の形成あるいは破壊のような——の達成

ようするにシュムペーターは、質的非連続的な経済発展の現象をその新結合の遂行といういわば経済組織の内面的論理に基点をおき、そこに利潤獲得の可能性を創造し、そうして合目的な経済行為を提起したことである。しかし彼は『景気循環』において「資本主義図式を支配するものは価格引下げ・あるいは根源的な不均衡、劇烈な競争等に関するすぐれた意見であるよりも、原価曲線をたえまなく変える新生産機能の仕組

に挿入された『革新』である。<sup>10)</sup>とのべているけれどもこの『革新』が、資本主義の macrodynamic な觀察との関連のうちにもとめられる限りにおいて、合目的な経済行為の担当者としての彼のいう企業者も経済動学としての人間類型の論理をとりうるといわなければならないてであろう。この点についてわれわれは、問題の理解上シユムペーターの次の説明に耳を傾けてみよう。

「新結合の遂行者がこの新結合によって凌駕排除される旧慣行的結合において商品の生産及び商業過程を支配したる人人と同一人である場合もあり得るけれども然しそれは事物の本質に属するものではない。むしろ新結合特にそれを具現する店舗、生産設備等はその觀念から云うも、また原則から云うも、単純に旧きものに置き代るのではなくて一応はこれと相並んで現れる。蓋し旧きものは概して自己自身のうちから新たな大進展を行う力を有しないからである。」かようにして、第一種の非連続性（即ち軌道の変更）の外にその第二種のもの（即ち発展担当事の変更）を創り出すばかり

「企業者」と資本主義過程の「革新」について（浜崎）

でなくさらに進んでその附帯現象の経過をも支配するのである。<sup>11)</sup>すなわちシユムペーターによれば、新結合が旧結合を攻略することによって遂行せられる競争経済においては(i)社会的地位の上昇(ii)社会的階級の交替(iii)景気の回転並びに財産形成機構等に関連する個別現象等がこれによって説明せられるのである。さて、以上のことは、新結合が行われる場合の現象、またその場合に生ずる問題についてのシユペーターの説明であるが、この点について彼は、新結合の遂行ということとは、また原則として、利用されていない生産手段を結合してなされるというように決して考えてならないという。もちろんそのような生産資源のいわば不完全雇傭が偶々存在することがあるであらう。しかしながらこのようなケインズ流の考えは、シユムペーターによれば経済発展の結果であり、また均衡のとれた正常的循環の場合には存在さえもしないものである。<sup>12)</sup>そこで新結合は、彼においては一般にその使用する生産手段を何らかの旧結合から奪取して来なければならぬ、

ということが結論せられる。そうしてこれは、とくに景気の経過に対しては重要な結果をもたらし、したがって旧経営態駆逐の第二の形態であるわけである。かくして新結合の遂行は彼の言葉でまた国民経済における生産手段の転用 (Andersverwendung des Produktionsmittel-vorrates) であるといわれるのである。したがって通例の資本形成論において見られる貯蓄と勤勉とからは、それ自体循環の静態的膨脹を意味する経済の成長を説明しうるにしても彼のいわゆる経済の発展に対して本質的な事態への展望を与えることができないとみなされてくるのである。時間の経過と共に徐徐にまた連続的に現われるところの生産手段の国民的貯蔵の増加および欲望の増大は、発展の機構にとってそれは現存生産手段の転用の背後に全く隠されてしまう。ようするにシュペーターの意図する発展の形態と内容とは、純粹に経済的——「経済」体系内部的 (innersystematisch)——なものの枠及び常軌そのものの變動にあり、いわばその過程に企業者の開拓

的な活動をもつてしたというべきであらう。シュペーターが企業者を変動の要因 (Veränderungsfactoren) としてでなくいわゆる變動の機構 (Veränderungsmechanismus) の担当者として理解するとき、革新の衝動<sup>13)</sup>によって現出される攪乱現象に應ずる経済過程とともにそれを経済発展の基本過程であるということが出来えよう。しかしながらもシュペーターのいうような變動の機構の担当者として認識しそれを許容するなら歴史的経験における経済過程としての資本主義構造の推移現象との関連において、彼の「企業者」は限界に達着し、その使命を不可避免的に涸渇させるのではなからうか。このことの詳細な論議は別の機会に譲ることにする。ともあれサミュエルソン (Paul A. Samuelson) 教授が指摘するように、<sup>14)</sup>革新者の始発的衝動に力点をおくシュペーターの發展理論は資本主義のエンデンが、成果を繰返す可能性をみ出しえない段階においては、企業者の合目的経済行為の契機は質的な変貌の過程をとるであらう。

さてわれわれは、シュムペーターの「企業者」が経済学的論理をもとめ、分析を要求するものであるなら、その体系上経済変動・発展の担当者としての構想分析を試みなければならないことを以上において考察してきた。一般的にいえることは、近代経済学の学問的自覚が現実態の認識理解におかれており、そのためにその過程を取扱うため一定のモデルを組立てるわけである。そして現実接近化を企てるために『セタアリス・パリバス』"Ceteris Paribus"、のいくつかを与件から変数に移すのである。このことは極めてモデルの現実化をもとめるのであるけれども、このようにして一つの『理念型』にまで構成せられた経済機構と現実形態の認識・理解との間には、距離が存在するということは明かである。われわれは、このような構想のもとにおける「企業者」活動と革新との関連の考察を企てなければならぬ。

註

- (1) Carl Menger: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Erster, allgemeiner Theil Wien. 1871.

「企業者」と資本主義過程の「革新」について (浜崎)

「国民経済学原理」安井琢磨訳、メンガーは、その序文において人間経済の複雑な現象をばその最も単純な・確実な觀察を尚許すがような諸要素に還元し、この諸要素に性質相応の測度を当て、かつこの測度を確保しつつこれらの要素から複雑な経済現象がいかに合法則的に生じるかを考察するところに自分の態度が存するのとべている。

(2) V. Pareto: Manuel d'economie politique, 1909.

(3) 『季刊理論経済学』第一巻・第四号所載「理論経済学と計量経済学」杉本栄一著参照

(4) 『近代経済学の基本課題』杉本栄一著・四一頁第一章『近代経済理論の近代性とその歴史的限界』参照

(5) 彼は『景気循環』第一巻・二二三頁において資本主義を定義して次のように述べている。

「資本主義は、借入金によって経済上の革新が行われるような私的性質の経済社会である。この借入金は必ずしも信用創造を意味しないが一般的に信用創造による」シュムペーターはきわめて自由な購買力にもとづく創造的社会として資本主義社会を考えているのであるが、それは銀行の信用創造にもとづくものであった、「企業者」は、常に必ず信用の需要者であり彼の言葉によれば「典型的な債務者」である。彼の信用創造理論は、「マクナロー (H. D. Macleod) の "The Theory of Credit" London, 1897. にきつて現金信用 (cash credits) を当座勘定信用 (Kontokorrentkredite) の意味におくって規定し

たのであるが、いまだ経済発展との関連においては考えられていなかったのをうけついで追加的信用が経済的生産力を増大するものであり経済的発展の槓杆となるものであるという命題に発展したのである。

- (6) A・B・ティマンズ氏は上掲論文六一頁—六二頁にわたって社会学者タルドとシュムペーターのヴィジョンが血縁関係にあることを指摘した。

- (7) 酒井正三郎博士『経済体制と人間類型』(岩波書店二八年二月)博士はシュムペーターの経済動学を他の学説と対決させながら「企業者」の動向分析を試みておられる。  
 “Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, S. 100.

中山・東畑訳書・一六六頁

- (9) 『景気循環』第一巻、八四頁においては彼は次のようにいう。われわれは、標準状態のように取り扱ひさえする新財貨の導入を包含する、すでに利用されている財貨の生産における技術的变化・新市場の開発・供給の新源泉の開発・労働のテイラーシステム・材料の改良的処理・デパートメント・ストアのような新しい商業取引組織の設立——要約するなら経済生活の領域における或る異った行為的事項——すべてこれらのことは、われわれが「革新」の言葉によっている例証であると。

さて、既に吉田昇三教授が『経済理論』(和歌山大学経済学会・第一号一九五〇年十一月発行)において指摘されたようにシュムペーターの『景気循環』における Economic Evolution の定義と『発展』における Die

wirtschaftliche Entwicklung との定義の相違である。

- すなわち後者においては、「経済が自己自身から生む経済生活の循環の変動・自己自身に委ねられて外部からの衝撃によって動かされないところの国民経済に起りうべき変化」(訳本一五八頁)であり、そうして本文で私がいうように「第一には経済から自発的に生れ、第二には、非連続的な変化」(訳本・一六三頁)であるわけだが、前者、『景気循環』においては本註の最初に紹介したように同じ現象は「貫してすべて「革新」(Innovation)とよばれていることである。このことは、シュムペーターの学説の検討及び理解においてきわめて注意すべきであろう。次に『発展』における「生産要素の結合」という場合、酒井博士は、ヒギンズが『近代の経済変動論』(“The Modern Theory of Economic Fluctuation,” Twentieth Century Economic Thought)におうと云うよう(二九五頁)生産要素の価格変動なくして起る生産単価の減少であるというべきであって生産要素の価格変動を通じて「生産要素の新結合」が起ることは通常である。これがシュムペーターのいう新結合ではない。したがって新結合は単に生産函数の変化というべきでないと指摘しておられる。酒井博士前掲書一〇一頁(註)を参照
- (10) J. A. Schumpeter, “Business Cycles,” Vol. 1, p. 91.
- (11) 註(9)を参照された。
- (12) 酒井博士前掲書一〇一頁
- (13) “Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung,” S. 93.

中山・東畑訳書一五四頁

- (14) Paul A. Samuelson: Schumpeter as a Teacher and Economic Theorist, The Review of Economics and Statistics, May, 1951.

この論文はハリス(Seymour E. Harris)の編集した追悼論文集『社会科学者シムムペーター』(『Schumpeter, Social Scientist, 1951.』)第二章『人と業績』に収められている。筆者は後者を参照した。

#### 四 「企業者」と「革新」の原理

クズネッツ教授(Simon S. Kuznets)は、『アメリカン・エコノミック・レビュー』(American Economic Review, June, 1940. p. 270.)においてシムムペーターの学説構成上の本源的要因としての「企業者」、「革新」及び「均衡ライン」(equilibrium line)の概念、ならびに循環的変動をとらえ、その失敗を非難している。このことは、いくつかのことをわれわれに考えさせるであらう。すなわち先ずシムムペーターの理論が国民所得の理論と無関係に運ばれていること、次に彼の理論が、ハイエク(Friedrich Hayek)の景気変動の説

「企業者」と資本主義過程の「革新」について(浜崎)

明におけると同様に、主として完全雇傭の前提のもとにその動態現象の説明がなされていることである。いわば雇傭理論に無関係にシムムペーターの発展の理論が展開されていることである。このことはすてにベニオン(E. G. Bennion)によって指摘されているし、また彼のケインズ学派特有の装置のもとに融合を試み修正を企画してさえもいる。<sup>(15)</sup> またバンダービルト大学(Vanderbilt University)フェルス教授(Rendigs Fels)は『景気循環論』においてシムムペーターの『景気循環』におけるKichin 波動、Jugar 波動、Konratief 波動の三つのシムムに最も重大な弱点があるとのべ、それを「革新」と gestation period との関連において指摘している。<sup>(16)</sup> ともあれ、われわれは、クレメンヌ(Richard V. Clemence)とドウディー(Francis S. Doody)がいうよう<sup>(17)</sup>「革新」はシムムペーター学説の internal factor として、きわめて検討に価するものといふべきであらう。

さて、シムムペーターによれば一般的均衡状態に

ある経済体系においては生産函数の変化をもたらす「革新」はなく、また消費函数の変化もなく、習慣的な軌道を通じて経済生活が進んでいる世界の中では、すべての家計と企業の行動は規則正しく、くりかえされている。いわば経済生活は「循環の流れ」(The

出現することになるのである。今の場合かような動態理論えの展開方式を企図しこれの検討を試みる必要はないであろう。われわれの課題はその「循環の流れ」の世界にもちこまれる「革新」と「企業者」の関係をうきぼりのにとらえることである。

Circular Flow)として営まれている。その「循環の流れ」の体系のうちすべての企業は、平均生産費曲線と限界生産費曲線との交点に価格がおちつく完全競争的均衡状態にあり、その収入(receipts)は費用(expenditures)《賃銀と地代に分解される》に等しく、利潤は零である。したがって、投資機会は存在しないから利子率(rate of interest)も零である。また体系内のすべての家計は、完全な長期的均衡状態にあり収入は支出に等しくいわば「時間選好」(Time preference)もない貯蓄もない。以上がシユムペーターにおける静態理論の骨子であった。この『循環の流れ』の世界の中に企業者によって「革新」すなわち生産函数の変化がもちこまれると利潤可能性が現出し新投資の機会が

いまソー教授(Carolyn S. Solo)の言葉でもって

「革新」を定義するならば、すでに利用されている知識に対する現実的な技術的管理にもとづく変革ということができらるであろう。しかしながらもし、「革新」をそのようなものとして考えるとするなら、当然発明といういわば利用可能な知識上の変化との関連が問われなければならない。シユムペーターは、「革新」を解明する場合発明との関係を次のように考えた。すなわち「革新」は、発明と同じ意義をもつものではないといふことは、直ちに気がつくであろう。……発明という言葉がいかなることを意味するにしてもわれわれにとつて縁遠いものではない。発明の形成それに符合的な「革新」の出現は、経済学上また社会学上全く

相異なる事柄である。發明と「革新」は、同一主体によって形成されたかも知れない。また事実両者は同一主体によって形成してもいるのである。しかしながらこのことは決して両者の区別の厳密さををかすものではない。それは単に機械的な一致にすぎない。それら両者の人間的特質——發明者 (inventor) の場合においては、最初から知的であり、「革新」は發明を志向する經營者 (businessman) の場合は、極めて意欲的である——及び方法領域は自ら別なものである<sup>6)</sup>と。したがって彼は、「『革新』はわれわれが發明とよぶところのものと一致する何ものもなくとも可能である<sup>7)</sup>」ということができるのである。經濟學者の観点からすれば生産ということとは、生産諸要素の量的結合を意味するであろう。かような結合というのはい定時点についての生産高に対する生産用役の必要量に関連する生産機能の方法によって完全に叙述されるものである。所与の歴史時点の生産機能は知識の存在状態に徴して企業を展開する技術的可能性を現はすのである。すでにわ

れわれが考察したように、循環經濟においては、ある所与の産業上のすべての企業は、同一機能を所有するのみでなく、同一な生産コストをなしているわけである。もちろん特種な生産的結合は、生産的用役の価格の変化に応じてその固定生産機能のうちで変化するかもしれない。ともあれ「革新」は、かような調整に反して今迄形成されたことのない結合を生産組織の中へ導入するいわば「新生産機能の定立」として明らかにされるのである<sup>8)</sup>。したがって「革新」は經濟變革の過程を引受けるものであるということができえよう。シュムペーターは『景氣循環』においてこの点について「『革新』によってもたらされた經濟過程内の変化を、そのすべての作用および經濟体系によるそれへの反応とあわせて、われわれは經濟發展の用語によって呼ぶであろう<sup>9)</sup>」とのべているのであるけれども、われわれがまさに彼の學說の檢討・批判をなす場合細目的な領域をばさておいて、全くこの「革新」の考察は彼の學說構成の本質に貫くものということができえよう。こ

の意味においてクレメンス・ドウディ教授の『シユムペーター体系』("The Schumpeterian System," 1950)の語るところに耳を傾け後述するための必要があることとすべし。

註

- (1) E. J. Beninon, "Unemployment in the Theories of Schumpeter and Keynes," American Economic Review, June 1943, pp. 336-347.
- (2) Rendigs Fels, "The Theory of Business Cycles," The Quarterly Journal of Economics Vol. LXVI Feb., 1952, No. 1, pp. 26-32.
- (3) Richard V. Clemence and Francis S. Doody; The Schumpeterian System, 1950, p. 36.
- (4) 生産函数の変化(前節註(9)においていうように只単に生産要素の価格変動にもとづく函数の変化でなく酒井博士の言を借りるならば生産要素の価値変動なくして起る生産単価の減少にもとづく生産函数の変化を含む)を問題とするシユムペーターの場合、これは質的变化に通ずるのである。生産函数不変の条件の下においてケインズが『生産拡張』を考え、ハロッドが『生長』を企図し、その量的変化を問題とする場合とすると対立に立つものといえよう。そうしてこの点こそマルクス学説における絶対的剰余価値の生産・相対的剰余価値の生産が量的・質

的变化の構図を分析した場合ときわめて類似をなすところがある。

- (5) C. S. Solo, "Innovation in the Capitalist Process," A Critique of the Schumpeterian System, (Quarterly Journal of Economics, Vol. LXV, 1951, No. 3, p. 417.)
- (6) J. A. Schumpeter, "Business Cycles," Vol. 1, pp. 84-86.
- (7) Ibid. p. 84.
- (8) シユムペーターは『景気循環』八七頁—八八頁において次のようにいう。  
われわれは新生産機能の定立として「革新」を簡単に明らかにするであろう。……「革新」は新方法における諸要素を結合するし、また「革新」は、新結合を遂行することによって形成せられると。
- (9) Ibid. p. 86.

## 五 「革新」に対する批判の検討

クレメンス・ドウディによれば、いろいろの著述を通して展開されてきた限りで、シユムペーターの「革新」に対する重要な問題は以下のようなものであるといふ。すなわち先ず (i) その定義の目的について全く原理的な問題が存在するということである (J. W.

Angell, *Investment and Business Cycles*, pp. 352-333.

Küznets, "Schumpeter's Business Cycles," *American Economic Review*, June, 1940, p. 263.) (ii) 「革新」

の概念は使用上においてあまりに広義である。より狭い型の変化に限定されるべきである (O. Lange, "A

Note on Innovation," *Review of Economic Statistics*, Feb. 1943.) (iii) 或る批判は、「革新」の定義を非常に

広い領域に見出す (W. W. Rostow, *British Economy of the Nineteenth Century*, p. 29.) (iv) 定義内容の面

から、「革新」がどのように均衡の近接点において導入されているかを説明するのに失敗しているという非

難の問題 (J. W. Angell, *Investment and Business Cycles*, p. 233.) (v) 「革新」が変革の単一な原因として

考察されているという非難、がそれである (R. S. Kierstead, *Theory of Economic Change*, p. 97. A. H.

Hansen, *Fiscal policy and Business Cycles*, p. 352.) さてそれら問題の一つ一つをとりあげて批判・検討を

加える必要があるであろうが、それは私の能力の及び

「企業者」と資本主義過程の「革新」について (浜崎)

うる範囲ではない。ただ私のなしうる考察は、コーター・シヤナル・オブ・エコノミックス (*Quarterly Journal of Economics* Vol. LXV, 1951, No. 3) 所載の C・S・ソロー教授による「資本主義過程における『革新』」——シユムペーター体系の批判——の論文をめぐって出来るかぎり詳細にシユムペーターの「革新」を考察し可能な範囲において教授のその論述に批判をなげてみることにする。

われわれは、『シユムペーター体系』において展開されている「革新」えの非難の数数を見討することなく通りぬけているわけであるが、ともあれ、それらの非難が正当にシユムペーターの学説上に位置する「革新」の概念に対する批判として適合するものであるなら、自ら学説自体の修正を要求されるであろうということば、明らかなことであると同時に、「革新」の概念もそのままにしておかれないものであろう。そこにおいて、もしソロー教授の論文がそれらの批判群と同様に一瞥に価するものなら衝突の順準としてシユムペ

「ター自身の言弁を対決して採りあげることが、興味があるであろう。

「新生産機能の定立」(“the setting up of a new production function”)としての「革新」の定義は、可能な活動的変革をカバーするものであるがシウムペーターは、これを『発展』において新結合の遂行という言葉で表現し五つの場合を考えた。また『景気循環』において、「革新」の言葉でよぶ例証として、すでに利用されている財貨の生産における技術的変化・新市場の開発・供給の新源泉の開発・労働のテイラーシステム・材料の改良的处理・デパートメントストアの様な新しい商業取引組織の設立を具体的な行為的事項として包含した。そうしてすでにわれわれがみて来たように、彼は「革新」と発明とが同義でないことを指摘し、「発明という言葉がどのようなことを意味するとも、それはわれわれにとって無関係なものではない。そのうえ発明は、誤った聯想をもたらす。」とのべそれら両者の本質的な人間行為の態様の相異を区別した

のであった。いわば「シウムペーター学説の立場からすれば、発明は内在的要因でない」のであり、したがって学説の一部分として発明の理論を構想することは誤ったことであるといわなければならない。『シウムペーター体系』の著者達の指摘したように、C・D・マーリン(Sidney D. Merin)は『現代経済思想における変動の理論』において、R・フレイシュ教授(Ragnar Frish)の『動態経済学における衝動問題と増殖問題』(“Propagation Problems and Impulse Problems in Dynamic Economics,” Economic Essay in Honour of Gustav Cassel)をとりあげ「フレイシュ教授は、シウムペーターの発明の理論が経済組織における動揺(oscillations)を支えることを必要とする他の源動力を暗示していることをすぐれて考察するの(前掲書二〇三頁)フレイシュ教授によって展開された同様な仮定は、景気循環における Strategic Factors について J・M・クラーク教授によって独立に展開されたものである。<sup>5)</sup>しかしながらクラーク

教授は、決定的な分析を試みなかった。けれども彼の論議は、フリース教授の論議よりもより具体的ではある。そうしてクラーク教授は、循環は任意的攪乱(random disturbances)の結合の結果であると示唆した。そうしてそれらは任意的攪乱の結果を累積的につたえる経済組織であると考えたのである。」われわれは、「革新」と発明についての論議をC・D・マーリン氏の著書から引用したわけであるが、それはようするに、シュムペーター理論における「革新」の意義を發展の理論との関連においてとらえるためであつた。

さて『革新』は発明と一致すべき何ものもなくとも可能である。」とシュムペーターが語るとき、フリース教授がのべたように、彼は、oscillationとしての発明でなく資本主義生産図式を支配するいわば実存の原価曲線の変動要因としての「革新」を明確に概念として考えている、ということができる。したがってシュムペーターが「新生産機能の定立として『革新』を明確にするであろう、……『革新』は新しい方法にも

とづいて生産要素を結合するし、あるいは、『革新』は、新結合を遂行することにおいて形成せられる」という場合ソー氏がいうように、これらの叙述のうちには、「革新」が発明によって生ずる必要がないということを除いて「革新」の源泉に関するなんらのヒントもないといわなければならない。すでにわれわれが考察したように、シュムペーター學説において「利潤」は一つの動的現象であるわけだが、それは動態経済社会においてのみ可能であり、そうしてこの可能性はきわめて發展にとつての誘因である。しかしながらこの強調は、「革新」が新しい財貨の導入の「型」を採ることが出来るという彼の認識にもかかわらず旧財貨を組成する導入として「革新」を——したがってより少い費用の方法で——考えていたことは彼の論述にしたがつて述べて来たところである。ともあれ彼が利潤可能性を發展にとつての誘因として考える基底には「革新」が存在したわけである。しかしながら発明と「革新」とが異質的な行動類型であることが明らかで

あり、「革新」が発明に源泉をもとめないものであるなら、シユムペーターは一体、その根源を何にもとめたのであろうか。そのことについて彼自身の言葉に耳を傾けてみよう。

「或る人は利潤の可変的な（観念的に正しい）期待によって聯想された「革新」を様様な機敏な計画をもって工夫し、そうして解決する。また新しい未知な障得と斗争しはじめるのである。われわれは、企業的態度の一部分のように先鞭をつける『能力』をそれにみるのである。したがってこのことは、われわれの現在の目的にとって例えば新しい消費者財貨の生産を決定することに第一次的である一主体を同一視することはわれわれにとって可能なことである。その一主体がなにも以前のように行爲しないかという理由は、われわれが問題として究明しようとする均衡を現実に前提において、仮定する動乱のうちに存在するからである。」<sup>9)</sup>この叙述において分折されたいわば「革新」の源泉の設定は、いうまでもなく企業者能力Ⅱ（一面冒險家的でさえある能力）、すなわち

企業者となりうる精神的行為のうちに存在するということを描いたことである。

われわれはシユムペーターの「革新」についての所論をうかがったわけであるが、先を急いで本節の使命に立ち帰らねばならない。シユムペーターは資本主義社会制度の「型」自体に新結合（すべて他の事実の存在しない場合にそれらは知識の急激な増加に依存して存在したであろう）の可能性が存在するであろう（<sup>10)</sup>）もかくそれは仮定ではなくして）というが、C・S・ソロー教授は、「もしこのことが認められるとするならその場合、その理論は知識の増加と新結合の両者の間に必然的な連鎖が明らかに形成するということを見落している。」<sup>11)</sup>と批判し、そうしてまたシユムペーターが「企業者は導入する財貨や、製造工程の発明者であるかもしれないが、それは必要なことではない。」<sup>12)</sup>と語る場合ソロー教授は、企業者が発明家でない場合、その発明の構想をいかにして企業者は獲得するのであろうか。また「革新」についての必然的知識をいかに

して獲得するのであろうかと問を發しそうして新知識がなんとなく一般的に、継続的に利用出来るという『景気循環』の一三〇頁から一三一頁にわたる論述には相当問題があるという。したがって、シユムペーターのいう「革新」に対する障礙を探し求めんするなら、それは經濟上に存在するということが示唆されるし、反面、そのために当然なものが明らかであるとするなら、それは經濟均衡よりも完全な技術的知識の存在ということが考えられるであろうということは明らかである。続いて教授は、シユムペーターが「革新」を純粹に企業の経営活動として叙述するその論議は、「いわば企業者が新しい「趣向」を購入するということを意味するかもしれないし、そうして、またその増加した知識と新生産機能との連鎖は commercial transaction であるということの意味するかもしれない。しかしながら彼には、これらの新しい趣向が売却せられる『市場』に関する論述も存在しないし、またその新しい『趣向』の提供・および価格論議も存在しない。彼の

「企業者」と資本主義過程の「革新」について（浜崎）

説明によればその新趣向はどういうものか特定の企業者に保存されることになる。」したがってシユムペーターの「革新」についての説明は、企業者となった発明者の場合は「革新」の諸計画を含んでいたかもしれないし、そうして発明者の労作を利用する革新者は、おそらく生産上の諸要因とともに特許権 (patent right) を買い上げていたことになる。しかし今日企業が発明を約している調査研究發展の方法には、シユムペーターの説明は適しない。今日産業調査は「革新」に生成する計画を提供するのであっていわば「革新」を創設することが出来るわけである。しかしながら特許権の購入される場合においてさえ一層企業の仕事は、技術的スタッフによってその「革新」を展開することに心がける。これらが真実である限り発明は經濟活動として現れるのであるが、別して特定の「革新」が特種な調査研究を要求し、それによって展開する場合は、經濟活動として表現されるものといわねばならない。以上がソロー氏のシユムペーターの「革新」に対する

批判の骨子である。次にわれわれは「革新」の過程及び意味についての彼の批判を検討してみなければならないのであるが、すでに別の機会を紹介をしておいたからここでは省略する。<sup>11)</sup>

ようするにソロー氏の「革新」に対する態度が、企業の客観的な正常な存在条件・あるいは姿として「発明」をあるいは「革新」をとらえなければならない、というところにある点からすれば「革新」が new man, new firm の精神的構成分野にあるとするシムペーターの態度には、辛辣な批判をなさねばならないであろう。もちろんソロー教授がいうよう資本主義過程において「革新」は日常の経営活動 (an ordinary business activity) としてとらえ他の経営活動と同様に企業の収益目的にかかわって考慮されねばならない。いわば生産コストの関連において、把握され競争市場との過程に遂行されるものとしてとりあげねばならない。したがって動態経済の現象としての収益が、存在する生産諸要素に転嫁されるということは、論理的

に把握できるのであるが、それはいわば低廉なコストで売却することのできる新結合における生産要素の利得から生成するということができるのである。

「もし発明や『革新』が正常な経営活動であるなら、財源の循環は、発明・および革新上に要する費用や成功的な『革新』からの収益を含むことが出来る。したがって当座の費用は、当座の収益によってまかなわれる、だから費用は『革新』にとって成功的な企てである場合と同様に、不成功な、すなわち失敗に終わってしまう企ても包含する。」このことからして「革新」は、生産者達の産出高の一部分となり、そうしてそのことによってより現実的な概念として把握されることになる。「発明及び『革新』が経営生産高の一部分であるなら、シムペーターの『革新』についての見解は、修正されることになる。」以上がソロー氏のシムペーター学説の「革新」に対する窮極的な批判であった。われわれはソロー氏の論文にしがたってきたわけであるがすでに酒井正三郎博士が指摘されたように、シム

ムペーター学説の「革新」が発明からきりはなして考察されているのであるが今日の企業が実験と調査研究の上に正常の経営活動として革新を行いつつある点を見逃していることを批判した訳である。その批判の起点について博士ものべておられるようにたしかにシユムペーターの資本主義の運命観との関連において考察されねばならないであろう。しかしながらたとえそうであるにしてもわれわれは、シユムペーターのいわば経済の発展の構図をぬきにしては考えることができないことはもとよりである。そうとすれば彼のいう企業者という人間類型の経済学上の論理性との関連に当然「革新」も存在するものであるといわなければならぬ。いはばここにこそ批判の規準が存するのではなからうか。ソロー氏の論文は、もちろん資本主義過程上の「革新」についての分析としてはきわめてわれわれに示唆をあたえうるものである。しかしながら、シユムペーターの「革新」がとりわけ経済発展の始発的衝動的観点からとらえられており、そうして経済動学の要因と

しての「型」に収められておるといふ認識に立つならば、また構想的な発展の抽象像をもとめるといふ認識に立つならば、ソロー教授の見解との間にすてに方法的に誤差が横たわっているのではなからうかと思われる。

#### 註

- (1) R. V. Clemence and F. S. Doody: *The Schumpeterian System*, 1950. pp. 36-37.
- (2) Carolyn S. Solo, *Innovation in the Capitalist Process: A Critique of the Schumpeterian Theory*, pp. 417-428.  
著者は、『立命館経済学』（第二巻・第三号・二八年六月・一二六頁—一二三頁）においてこの論文の内容を紹介しておいた。詳細な理論の展開についてはこれを参照していただきたい。
- (3) R. V. Clemence and F. S. Doody: *The Schumpeterian System*, 1950. pp. 38.
- (4) S. D. Merlin: *The Theory of Fluctuations in contemporary Economic Thought*, 1949. p. 83.
- (5) J. M. Clark: *Strategic Factors in Business Cycles*, pp. 21, 62-63.
- (6) J. A. Schumpeter, "Business Cycles," Vol. 1, p. 84.
- (7) *Ibid.* pp. 87-88.
- (8) *Ibid.* pp. 130-131.
- (9) *Ibid.* p. 130.

(10) Ibid. p. 130.

(11) 拙稿「資本主義過程における革新」——シユムペーター理論の批判——『立命館経済学』（第二巻・第三号・二八年六月）一二〇頁以下の参照を乞う。

(12) 酒井博士前掲書一一頁参照

## 六 あとがき

われわれは資本主義に対する敵対的雰囲気がその実績にとっての有罪宣告の結論にもとづいてなされていることをしている。シユムペーターは資本主義は、生き延びることができるかと自問しながらも否、できるとは思わない。との結論に到達せざるをえなかった。しかしながら彼のその結論への道ゆきは、資本主義の有罪宣告をはらむが故ではなかった。その経済的成果は、総生産量の増加率の客観的分析にもとづいて検証されるよう<sup>2)</sup>、資本主義のエンジンは快適なリズムを奏てながら天晴れその経済体制を創造し発展させたのである、「およそ資本主義は、本来経済変動の形態乃至方法であって、決して静態的ではないのみならず、決

して静態的たり得ないものである。しかも資本主義過程のこの発展的性格は、ただ単に社会的、自然的環境が変化し、それによって又経済活動の条件が変化するという態度の中で経済活動が営まれる、といった事実に基づくのではない。この事実も成程重要であり、これらの変化（戦争・革命等々）は屢々産業変動を規定するものではあるが、しかもなおその根源的動因たるものではない。……資本主義のエンジンを起動せしめ、その運動を継続せしめる基本的衝動は、資本主義的企業の創造にかかる新消費財、新生産方法、乃至新輸送方法、新市場、新産業組織形態からもたらされるものである<sup>3)</sup>。」不斷に旧きものを破壊し新しきものを創造して、絶えず内部から経済構造を革命化する産業上の突然変異こそ企業の組織的發展であり、この「創造的破壊」(Creative Destruction) の過程こそ資本主義についての本質的事実である。それはまさに資本主義を形作るものであり、すべての資本主義的企業がこの中に生きねばならぬものである。いわばこの「創造的破

壊」の過程こそシユムペーターにおいて資本主義の有罪判決のゆえに崩壊に向うのではなくして「成功こそが資本主義をくつがえす」という答案が作成されねばならなかった論理的要因であるわけである。われわれ

は、この小論において試みた企業者と「革新」の原理の経済学的意義もこのことにかかわってみいだされねばならない。彼の説明によれば「企業者」を主動因とした経済過程そのものは萎縮することなく進行したとしても、この社会的機能は、資本主義の昇華した現在においてその重要性を失いつつありしかも、将来必ずや加速度的に失われざるを得ないものである。その理由についてシユムペーターは次のことを挙げる。すなわち、

日常業務の埒外にある仕事をなすことが昔よりはるかに容易になったこと、経済的変化になれてしまつて抵抗する代りに当然のこととしてそれを受け容れるやうな社会環境の下においては、人物・意志力が重きをなさなくなること、このようにして経済進歩は、非人格され自動化される傾きにあるわけである。かようにし

「企業者」と資本主義過程の「革新」について（浜崎）

て、彼の場合社会主義への真の先導者はそれを説法した知識人や煽動者ではなくしてヴァンダビルツ（Vanderbilt）、カーネギー（Carnegie）、ロックフェラー（Rockefeller）の一族の人人であるわけである。

さてわれわれは、「企業者と資本主義過程の革新について」のテーマのもとにシユムペーター学説を『本質』および『発展』にしたがつて概略的に考察し、これをローザンヌ学派の学説と対決させながら考察した。そうしてその学説の特異性を歴史的経済社会（多元的構造）の分析方法の差異にもとめて「企業者」と「革新」の問題に到達した。次に四節においてその「革新」の意味・内容を把握することに努力し、五節の企図したシユムペーターの「革新」に対する批判の検討をめぐる分析に処したのである。したがってこれらを前提としながら五節においては、C・S・ソロー氏の批判を紹介しこれに検討をくわえ問題の所在を明らかにした。このような仕組でこの小論を進めてきたわけであるが、ともあれ一般に純粹理論経済学者が経済社会

の質的問題（経済体制）を止揚し量的把握・分析の領域に経済学的自律性を要求するにくらベシユムペーターが、量的分析の方法を基底にもちながら、質的ないわば経済体制の動学的分析に「企業者」という人間類型をもってこれにあてたことは全く異彩な光輝である

といわなければならないであろう。われわれはそのような意味で「企業者」及び「革新」の分析に当って、スウィーजीが「革新」は「企業者」の社会学的タイプとしての機能であるといえるを一応認めるとしても、多元的経済社会の変革を「革新」にもとめたシユムペーター学説がそれを精神的志向としての「企業者」に源泉をみいだしたというところにマックス・ウェバー（Max Weber）がいうような資本主義の合理的精神に

よりどこをひめているのはなからうかと考える。したがってその意味において「企業者」はいわば「資本主義人間像」としての天性を自覚する動助経済主体であるということも出来るであろう。

## 註

- (1) J. A. Schumpeter; *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1949, pp. 61-
- (2) *Ibid.* pp. 63-71.
- (3) *Ibid.* pp. 82-83. 中山伊知郎・東畑精一訳書（上）一四五—一四六頁
- (4) *Ibid.* p. 132. 中山・東畑訳書（上）二三二頁参照
- (5) *Ibid.* p. 134. 同 訳書（上）二三六頁参照
- (6) P. M. Sweezy, "Professor Schumpeter's Theory of Innovation," *Review of Economic Statistics*, Feb., 1943, pp. 93-96.